

# 福岡県の高等学校入学者選抜に関わる音楽の学力検査の特徴 —教育委員会の対応と検査問題の実際に着目して—

## Characteristics of the Achievement Tests in Music for High School Entrance Exams in Fukuoka Prefecture

鶴 岡 翔 太

Shota TSURUOKA

音楽教育研究ユニット

(令和6年9月30日受付, 令和6年12月23日受理)

### 抄録

本稿の目的は、福岡県の高等学校入学者選抜に関連して実施された学力検査における音楽に関する出題の特徴を明らかにすることである。音楽の検査問題は中学校音楽科の実態に大きな影響を与えたにも関わらず、津田正之(1998)、それに続く拙稿(2022, 2023)によって全国的な状況が把握できた段階にあるのが、研究の射程である。高等学校入学者選抜は各都道府県教育委員会が所管する事項であること、これに関わる学力検査が各都道府県単位で実施されていることを考えると、各地の実施状況や実態に肉薄した研究の必要性は自明のことである。そこで本稿では、福岡県を対象を限定し、文部省による指導に対する福岡県教育委員会の対応、福岡県の学力検査における音楽に関する出題について、一定の整理を試みた。

### 1. 本稿の背景と目的

正常な音楽教育が邪道に陥り、ゆがめられてゆく傾向を生じている。……音楽の本質的陶冶が困難となり……音楽教育向上を阻害する由々しい問題といわねばならぬ。……教育は根底から破壊されようとしているのである。<sup>1)</sup>

こう記したのは、その当時に福岡市立百道中学校の校長だった福島謙次である。ここには音楽の検査問題に影響を受ける中学校音楽科の実情が投影されている。中学校音楽科と高等学校入学者選抜は一見縁遠いように感じられるが、戦後の日本の学校教育においては、高等学校入学者選抜に関わる学力検査に音楽の問題が出題されていた時期がある。

全国的に音楽の問題が出題されていたのは、昭和25年度から昭和42年度の入学者選抜の時期である。この時期の『教育音楽』『教育音楽 中学版』

には、冒頭に示した福島のように中学校音楽科の状況を憂える言説が散見される。だが、そうした状況を引き起こした検査問題そのもの、それと現場の実態との関係について検討した研究は限られたものしかない。

中学校音楽科と高等学校入学者選抜に関わる音楽の学力検査について取り上げた研究の嚆矢は、津田正之(1998)である。中等教育の音楽科に関する史的研究は、初等教育のそれに比して立ち遅れている。そうした状況を踏まえると、津田(1998)はそれまで等閑視されていた「学力検査」という視点から中学校音楽科の実態を考察した研究として評価されるものである。そして、これまで筆者は、唯一の先行研究である津田(1998)に残された課題を解決する形で、文部省の方針と音楽の学力検査との関係を検討する研究(2022)、『教育音楽』『教育音楽 中学版』に掲載された言説を検討する研究(2023)を遂行してきた。津田(1998)や拙稿(2022, 2023)によって、高等学

校入学者選抜に関連して実施された音楽の学力検査の全体像が整理されつつある。しかし、高等学校入学者選抜は都道府県教育委員会（以下、都道府県教委）が所管する事項であること、これに関わる学力検査は今も昔も都道府県単位での一斉実施が原則であることを考えると、各地の状況や実態に焦点を当てた研究の必要性は自明のことである。

そこで本稿では、福岡県を対象を絞り、学力検査での音楽に関する出題の特徴を明らかにすることを目的とする。本稿では、文部省の指導に対する福岡県教育委員会（以下、福岡県教委）の対応、学力検査における音楽に関する出題について、一定の整理を試みる。なお、本稿の対象の特質に鑑み、これ以降の本文では主として和暦を用いる。また、本文中に含まれる引用文、提示する資料については、原文のまま示すこととする。

## 2. 福岡県の高等学校入学者選抜における学力検査

第二次世界大戦の終結後、新制高等学校の発足に伴って高等学校入学者選抜も刷新された。本節では、入学者選抜に関する文部省の方針及びそれに対する福岡県教委の対応について整理する。

### 2. 1 “学習達成度を測るため”の学力検査の導入

新制高等学校の発足時、入学者の選抜についてはどのように規定されたのだろうか。

昭和23年2月4日、文部省は新制高等学校の発足に際して実施される入学者選抜を前に、「昭和二十三年度新制高等学校入学者選抜について」<sup>2)</sup>を発出した。この通牒には、入学者選抜の方法を具体的に示した「新制高等学校入学者選抜要領」が含まれた。その内容は、資料1のとおりである。

要領の第一項には「選抜のための如何なる検査をも行わず」と記され、検査の代わりに「新制中学校よりの報告書」が選抜の資料とされた。このように第一項では、“報告書によって入学者を選抜する”という“手続き”が示されたわけである。そして、報告書を構成する内容は第二項に示され、その中の一つに「学力検査（アチーブメント・テスト）の結果」が含まれた。さらに第三項には、学力検査の実施単位（＝都道府県ごと）、対象（＝高等学校への入学志願者）、期日（＝都道府県ごとに一斉）が記された。

### 資料1 「新制高等学校入学者選抜要領」（昭和23年2月）

- 一、新制高等学校においては、選抜のための如何なる検査も行わず、新制中学校よりの報告書に基いて選抜する。
- 二、新制中学校よりの報告書には、次の事項を含む。
  - 1、知能検査（インテリジェント・テスト）の結果（但し今までに既に実施したもので選抜の資料として適当なものであればこれを用いる。）
  - 2、学力検査（アチーブメント・テスト）の結果
  - 3、教科学習成績
  - 4、個人的並びに社会的の性格、態度の発達の記録
  - 5、職業的見地よりする性格、態度の発達及び職業的適性の記録
  - 6、身体の発達記録
- 三、二の2に示す検査は都道府県毎に新制高等学校への入学志願者全体に対して一斉行う。
- 四、アチーブメント・テスト問題作成の方法、問題例、テスト実施方法、成績評定方法及び報告書の様式例等については、文部省において「案内書」を作成して、二月中旬に発表する予定であるからこれを参照されたい。
- 五、検査問題の作成その他選抜の実施に必要な事項は、都道府県毎に委員会を設けて、これにおいて研究審議する。
- 六、報告書に基く選抜にあつては、二の2と二の3とは同等の割合で扱いこれに二の4及び二の5を合わせ審査することとし、二の6については、修学不可能と認められるものを除くほか、等差をつける資料にしない。
- 七、五の委員会は、心理学又は教育学に造詣ある者、新制中学校及び新制高等学校の校長又は教員などをもつて構成する。

新制高等学校の発足に向けて、各都道府県教委はこの要領を参照し、入学者選抜を計画・実施した。福岡県においても、昭和23年3月20日に「昭和二十三年度新制高等学校入学者選抜要項」を含む「昭和二十三年度新制高等学校入学者選抜について」<sup>3)</sup>が発出された。この要領には「選抜のための如何なる検査も行わず、新制中学校よりの報告書に基づいて選抜する」と記され、報告書の内容項目も文部省が指し示したものになった。

### 2. 2 全ての必修教科での学力検査の実施

こうして実施されるようになった学力検査だが、文部省は翌年の昭和24年2月1日には「昭和24年度新制度高等学校入学者選抜について」<sup>4)</sup>を発出し、前年度（昭和23年度）の実施状況を踏まえた留意点として次のことを示した（資料2）。

### 資料2 文部省が示した学力検査の留意点（昭和24年2月）

- 一、学力検査（アチーブメント・テスト）は、国語、社会、数学及び理科の四教科のみにつき実施し、英語の学力検査を行ったり、実業に関する課程を有する学校において、その学校の必要とする教科を課したりしてはならない。

ここには、学力検査の実施教科を限定することが記されている。高等学校の入学者選抜に際して実施された学力検査は、中学校での学習達成度を見取る「アチーブメント・テスト」の役割を負っていた。しかし文部省は、時世に鑑みて、全ての必修教科でこれを実施することには否定的な姿勢を示していたのである。ところが、そのわずか9か月半後の昭和24年11月16日、文部省は「昭和25年度以降新制高等学校入学者選抜について」<sup>5)</sup>を発出し、「変更を適当と認める事項」の一つに学力検査の実施教科を挙げた。資料3は、その主文である。

**資料3 実施教科に関する変更点（昭和24年11月）**

二、学力検査は、従来は、必修教科のうち、国語、社会、数学、理科のみについて行つたが、今後は中学校における必修教科のすべてにわたって実施することが望ましい。……

これは、前の通達（昭和24年2月）で限定した学力検査の実施教科を必修教科の全てに広げる方針転換である。このように音楽等の教科の学力検査も実施するように求められた背景には、「全人教育の完遂」という目的があったという。文部事務官だった近森一重によれば、昭和24年度の学力検査が実施された直後から検討が始まり、中学校の教育目標は全ての教科によって達成されるため、全必修教科から出題する必要があるという考えが共有された<sup>6)</sup>。この論理に立てば、学力検査の実施教科に含まれることは、中学校教育に必須な教科とみなされることと同然である。そのため近森は、文部事務官の立場から音楽の学力検査の実施を要請していたのである。

福岡県では、昭和25年1月発行の『教育福岡』を通じて「全必修教科からの出題」が広く周知された<sup>7)</sup>。にも関わらず、昭和25年度の学力検査は昭和24年度と同じく4教科（国語、社会、数学、理科）で実施された。文部省の意向に反する判断がなされたことについて、福岡県教委は次のように述べている。

高等学校側及び中学校側の教育運営の現状から実施教科の希望を聞かしてもらったところほとんど一致して四教科について行うことが切望された。教育進展の現状を検査問題の妥当性などから種々研究審議の結果今回も昨年度同様国語・社会・数学・理科の四教科を実施することになったのである。けれどもこれはあくまで過渡期の止むを得ない方法であって中学校教育の

正常な発展を期する上からも必修教科全般について実施することが望ましいということは明らかである。<sup>8)</sup>

進学希望者を受け入れる高等学校側と生徒に教育を施してきた中学校側、その双方の希望を聞き取るとともに、学力検査を実施することの妥当性などを現場の実情に照らして協議した末の「変更なし」の結論であったことが分かる。

同じ時期の各都道府県教委の対応をみると、福岡県教委だけが文部省の求めに応えられなかったわけではない。実際、昭和25年度の学力検査で音楽に関する問題を出題した府県は、6割に止まっている<sup>9)</sup>。ただし、文部省が通達を出したのが昭和24年11月、その趣旨を徹底するために説明を加えた問題例等を関係機関に送付したのが昭和25年になってからのことだった。これらの時期と学力検査の時期（1月～3月）を考えると、通達を踏まえた学力検査を全ての都道府県で実施するには、一定の困難があったと推察できる。近森も「通知が遅れたために、……新しく加えた教科のアチーブを実施できなかった地方も少なかつた」<sup>10)</sup>と当時の状況を語っている。

揺籃する文部省の指導、漸進する学校現場の実情に目を向けた判断だっただけに、福岡県教委も教科を限定した学力検査の実施は暫定的な措置と考えていたことが分かる（引用文中の下線部を参照）。実際、その翌年度（昭和26年度）の学力検査では、福岡県においても全必修教科からの出題が実現した。福岡県教委は昭和25年4月20日に開いた臨時会で「昭和26年度以降、高等学校入学者選抜要項」に対して行う学力検査の教科について昭和26年度以降においては全必修教科について学力検査を行なう」とする原案を可決した<sup>11)</sup>。そして、後に出された「昭和二十六年公立高等学校入学者選抜要項」に含まれた「学力検査実施要項」の第一項には、「学力検査は中学校における必修教科（国語、社会、数学、理科、図画工作、音楽、職業家庭、保健体育）のすべてにわたって行う」と記された<sup>12)</sup>。こうして、前年度（昭和25年度）には見送られた「全必修教科からの出題」が現実のものとなったのである。

以上が、福岡県の高中学入学者選抜に関連して実施された学力検査において、全必修教科の問題が出題されるようになるまでの経緯である。それでは、現代ではその姿を消した「全必修教科からの出題」は、いつまで続けられたのだろうか。



### 2.3 学力検査の実施教科数の見直し

昭和30年代後半、第一次ベビーブームに出生した世代が中学校を卒業する時期を迎えた。表1は、当時の中学校卒業者数と高等学校への進学率をまとめたものである。数値の変化を捉えやすくするため、音楽の検査問題が導入され始めた昭和25年度と第一次ベビーブーム世代が中学校を卒業する前年度（昭和36年度）の状況も併せて示す。

表1 昭和30年代後半の卒業者数と進学率

	昭和25年度	昭和36年度	昭和37年度	昭和38年度
中学校 卒業者数	1,588,227人	1,401,646人	1,947,657人	2,491,231人
高等学校 への進学率	42.5%	64.0%	66.8%	69.3%

※学校基本調査をもとに筆者が作成

昭和36年度に約140万人だった全国の中学校卒業者数は、昭和37年度に約195万人、さらに昭和38年度には約249万人に急増した。また、昭和25年度と比較すると、高等学校への進学率も上昇し続けていることが見て取れる。全ての中学生が高等学校に進学するわけではないが、中学校卒業者数の急増に進学志望者の数も呼応したことは想像に難くない。実際、第一次ベビーブームを背景とした状況の急激な変化は、高等学校への入学難、学力検査に向けた準備教育の過熱という図式を当然の如く招いた。

こうした状況を是正するため、昭和40年代に入る頃には、学力検査の実施教科を見直す議論が盛んになった。この全国的な気運の高まりを受け、文部省は昭和41年7月18日付で「公立高等学校の入学選抜について」<sup>13)</sup>を发出した。この通達では、学力検査の実施教科について、資料4のように示された。

資料4 実施教科に関する変更点（昭和41年7月）

3 学力検査の実施教科は、各都道府県において、従来の入学選抜の実施状況とその中学校教育への影響を考慮し、高等学校の種類と実情に応じて適切に定めるものとする。……

文部省は従来、全必修教科での学力検査の実施を求めてきた。しかしこの通達では、実施教科の設定を各都道府県教委の裁量に委ねる決定をしている。こうした国の方針の変更により、実施教科の見直しは全国的な趨勢となり、各地で議論が交

わされた。通達が発出された年度内に実施された昭和42年度の入学者を選抜する学力検査では、早くも全国の約半数にあたる24都府県が実施教科数を削減した。表2は、昭和42年度の状況を一覧にしたものである<sup>14)</sup>。

表2 昭和42年度の学力検査における実施教科数

9教科	北海道、新潟、茨城、神奈川、静岡、愛知、三重、京都、兵庫、和歌山、奈良、滋賀、岡山、広島、山口、徳島、高知、愛媛、香川、福岡、佐賀、熊本
5教科	青森、岩手、宮城、福島、千葉、栃木、群馬、埼玉、福井、岐阜、富山、石川、大阪、鳥取、島根、大分、宮崎、長崎、鹿児島
4教科	山梨、長野
3教科	山形、秋田、東京

東北6県が挙って実施教科数を削減していることなどから、各教育委員会は近隣の状況も視界に入れながら対応を決めていたと考えられる。学力検査を必修9教科で実施しなかった1都1府22県を日本地図に示してみると、その分布から横のつながりを感じることができる（資料5）。

資料5 昭和42年度の段階で実施教科を削減した都府県



昭和42年度の時点では、学力検査を9教科で実施している道府県は福岡県を含め22あったが、その数は昭和43年度に6府県（静岡、愛知、京都、広島、奈良、福岡）、昭和44年度には3府県（京都、広島、福岡）へと減少した。

迅速に実施教科を削減した都道府県がある一方で、福岡県はそれを実現するまでに時間を要した。福岡県高等学校入学選抜検討委員会は、次の理由から実施教科の削減に関する結論を得ることができなかった（資料6）<sup>15)</sup>。

#### 資料6 福岡県が実施教科数の削減に至らなかった理由

1. 教科削減は、検査教科のみ重視するといういわゆる特定教科偏重におちいる可能性があり、全人教育を目標とする中学校教育において、検査教科により人間の価値を問うようなこともおこり、教育の正常化がゆがめられていく危険性をはらんでいる。
2. 削減する教科の取り扱いについては、選考にあたって特に削減教科の内申の重視が必要とされるが、高等学校においてはこの内申の取り扱い上、中学校間の学校格差の問題等技術的に困難な問題が多い。
3. 検査教科の削減により、心理的には負担の軽減になるであろうと思われるが、受験生の学習時間や学習の絶対量は9教科の場合とあまり変わらないであろう。
4. 教科削減を実施している県においては、時日も経過しておらずその長短得失が明らかにされていない現状にある。

実施教科の「削減」は、必修教科を「学力検査を実施する教科」と「そうでない教科」に振り分けることになる。委員会が示した1の理由は、この振り分けが「教科の軽重」に置き換わることを懸念したものである。次の2の理由は、調査書の記載に一律の基準がなく、各中学校の実態もそれぞれに異なるため、削減された教科の学習状況を調査書から公正公平に見取ることの難しさを指摘したものである。

このように、実施教科の削減及び削減された教科の取り扱いをめぐる懸念や指摘が挙げられる一方で、3の理由は実施教科を削減しても改善が見込めない状況を示唆したものである。「学習時間や学習の絶対量は9教科の場合とあまり変わらない」のであれば、少ない教科での学力検査の実施は、1の理由にある「教科の軽重」を助長する可能性がある。また、4の理由からは、（よく言えば）実施教科数の変更には慎重な姿勢が見て取れる。

その後、福岡県では複数回の検討の場が設けられ、およそ10か月の期間をかけてこの問題が継続審議された。そして、昭和45年6月30日、福岡県立学校教育振興計画審議会はようやく、福岡県教委に対して「福岡県立高等学校入学者選抜方法の改善に関する答申」をするに至った。この答申の「三 入学者選抜方法の改善」において、学力検査の実施教科について「国語、数学、外国語（英語）の三教科にすることについては今後検討することも考えられるが、現状では国語、社会、数学、理科、外国語（英語）の五教科にすることが適当」とされた。実施する教科を9教科から5教科に削減することについて、福岡県教委は資料7のように説明している。

#### 資料7 実施教科の削減に関する福岡県教委の説明(抜粋)<sup>16)</sup>

- (1) 検査教科を五教科にすることについて
  - イ. 高等学校教育を受けるにたる基礎能力をペーパーテストによって見る場合、これに適した教科を選んだこと。
  - エ. 五教科以外の教科について実技テストを実施することは所用時間、評価の客観性などの点から事実上困難であり、かつ、実施したとしても、ごく一部の分野しかテストを実施し得ないこと。
  - オ. その教科の本来の目的および性格に照らして調査書を重視することによりむしろ正常な教育が行なえることを期待したこと。

学力検査を実施する五教科はいわゆる主要五教科だが、「ペーパーテストによって見る場合、これに適した教科」という建て付けになっている。それ以外の音楽、美術、保健体育、技術・家庭については、実技テストの実施が困難であることやその妥当性が検討された結果、「正常な教育が行なえることを期待」して「調査書を重視する」という方針が示された。答申でも、学力検査を実施しない教科については、調査書において「できるかぎり特記事項を所見欄に記入すること」が求められた。

このように、福岡県における学力検査の実施教科削減は、調査書の重視と併せて断行された。なお、答申に「昭和四十六年度入学者の選抜から実施するのが適当」と記されたため、昭和46年度の学力検査から「五教科」での実施となった。表3は、福岡県の高等学校入学者選抜実施要項に記された学力検査の実施教科である。

表3 福岡県における学力検査の実施教科の変更

昭和45年度	昭和46年度
中学校における必修教科（国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭）および選択教科（数学、英語）について県下一斉に同一問題で行なう <sup>17)</sup> 。	国語、社会、数学、理科および英語について県下一斉に同一問題で行なう <sup>18)</sup> 。

### 3. 福岡県の学力検査における音楽の検査問題

福岡県では、昭和26年度の学力検査から必修教科全ての問題が出題されるようになり、昭和45年度の学力検査までその形が続けられた。本節ではまず、この期間（昭和26年度～昭和45年度）に実施された福岡県の学力検査の変遷を、実施期日と実施方式の側面から概観する。それに続いて、音楽に関する問題の形式や内容を整理するとともに、全国的な動向にも目を向けながらその特徴を明らかにする。

### 3. 1 福岡県における学力検査の実施

表4は、福岡県で音楽の問題が出題されていた期間（昭和26年度～昭和45年度）の学力検査の期日と方式をまとめたものである。

表4 福岡県における学力検査の期日と方式（昭26～昭45）

年度	実施期日	実施方式
昭26	2/24（土）	第一群：国語、音楽
昭27	2/23（土）	第二群：数学、図画工作 第三群：社会、職業・家庭
昭28	2/21（土）	第四群：理科、保健体育
昭29	2/20（土）、21（日）	第一群：国語、音楽 第二群：数学、音楽 第三群：図画工作、国語 第四群：数学、図画工作 第五群：社会、国語 第六群：理科、数学 第七群：社会、保健体育 第八群：理科、保健体育 第九群：社会、職業・家庭 第十群：理科、職業・家庭
昭30	2/19（土）	第一群：国語、音楽 第二群：数学、図画工作 第三群：理科、保健体育、 職業・家庭 第四群：社会、職業・家庭
昭31	2/18（土）、19（日）	第一群：国語、音楽 第二群：数学、図画工作 第三群：社会、職業・家庭 第四群：理科、保健体育 選択：英語または職業・家庭
昭32	3/9（土）、10（日）	
昭33	3/14（金）、15（土）	
昭34	3/10（火）、11（水）	
昭35	3/10（木）、11（金）	
昭36	3/10（金）、11（土）	
昭37	3/10（土）、11（日）	
昭38	3/11（月）、12（火）	第一群：国語、音楽 第二群：数学、美術 第三群：社会、技術・家庭 第四群：理科、保健体育 選択：英語または職業
昭39	3/11（水）、12（木）	
昭40	3/10（水）、11（木）	
昭41	3/10（木）、11（金）	第一群：国語、音楽 第二群：数学、美術 第三群：社会、技術・家庭 第四群：理科、保健体育 英語（職業の場合もあり）
昭42	3/10（金）、11（土）	
昭43	3/11（月）、12（火）	
昭44	3/11（火）、12（水）	
昭45	3/11（水）、12（木）	

#### ① 実施期日

昭和26年度から昭和31年度までの学力検査は、2月後半、どの年度も土曜日に実施された<sup>19)</sup>。この6年間の期日をみると、特定の日付ではなく、曜日をもとに期日が設定されていたと考えられる。昭和32年度は期日を3月（3/9、3/10）に移しているが、土曜日実施を前提とした期日設定を想像させる日取りになっている。これ以降、学力検査は3月に実施されるようになった。昭和33年度こそ月の中旬に実施されているが、そ

れ以降（昭和34年度以降）は3/11前後の日程で同じ期日が複数年続く傾向にあった。多少の変化はあるが、昭和34年度以降は3/10-3/12の間の2日間に収まっており、曜日ではなく、日付から期日が設定されていたと推察される。なお、期日の設定に際しては、九州各県（指導事務）主管課長会議の場で申合せがあったことが記されている<sup>20)</sup>。県境に居住している生徒が通学可能な二県を両方受検することのないよう、両日あるいは一日を共通日に設定していたのである。

#### ② 実施方式

全必修教科の問題を出題するにあたり、福岡県では複数の教科の問題を混合させた「総合テスト」の形式が採られた。ただし福岡県の場合は、おおよそ二教科で一つの群が構成され、問題紙には教科別に作成された大問が置かれた。そのため、同一時間に二教科の問題に取り組むというのが、実際に近い。

#### 昭和26年度～昭和28年度

必修教科を二教科ずつの4群に分けた総合テストで実施された。なお、昭和26年度の学力検査をこの形式で実施したのは、福岡県の他に18府県<sup>21)</sup>あった。

#### 昭和29年度

必修教科の問題を出題すること、二教科ずつの群を構成することについては、過年度と変わらない。ただし、昭和29年度においては、群の数が4から10に増えている。ところが、実際には「二つの群を合わせて50分」という方法で実施されたため、検査日程（時間割）に大きな変更はなかった。なお、10群での実施はこの年度のみで、翌年度（昭和30年度）からは従来の4群による実施に戻された。

#### 昭和30年度以降

4群による学力検査は、教科の組合せもほとんど変えずに続けられた。昭和31年度からは選択科目が加わり、昭和38年度には学習指導要領の全面実施に伴い、図画工作と職業・家庭がそれぞれ美術と技術・家庭に改められた。また、福岡県では、昭和41年度から英語の学力検査が受検者全員に課せられた。

\* \* \*

全必修教科の問題が出題されていた時期の福岡県の学力検査について「実施期日」「実施方式」を視点に整理することによって、次のことがみえてきた。



- ①実施期日が2月後半の土曜日（曜日に基づく期日設定）から3月中旬（3/10-3/12：日付に基づく期日設定）へと移っていった。
- ②10群で実施した年度（昭和29年度）もあったが、それ以外の年度においては、群を構成する教科の組合せも大きく変えずに4群による総合テストが基本線として継続された。

### 3. 2 福岡県における音楽に関する出題の特徴

続いて、福岡県で出題された音楽の問題について、形式と内容の両側面からその特徴を検討する。

#### ① 出題形式

##### 「選択式」による出題

福岡県の学力検査は、音楽に関する出題に限らず、選択肢から適切な解答を選ぶ「選択式」によるものであった。「選択式」では偶然による正答の可能性も否定できないため、全国的にはこの形式での出題に対して疑問や批判の声も上がっていた。そうした状況を受け、記述式の問題を取り入れたり、選択式の問題の比重を減らしたりする動きもみられた。だが、福岡県の学力検査のうち、少なくとも本稿の対象とする期間（昭和26年度～昭和45年度）においては、「選択式」による出題が貫かれた。

##### 検査問題における譜例の提示

福岡県で出題された音楽の問題では、全ての年度において譜例が示されていた。表5は、音楽の出題における譜例の数と小節数、新曲・既習曲の別、図・画像の有無についてまとめたものである。示された譜例が単旋律以外の場合は、そのことが判別できるように（ ）に補足を付記した。なお、原則として、選択肢として示された譜例は集計から除外した。

表5 各年度の出題における資料の提示状況

年度	譜例数	小節数	新曲・既習曲	図・画像
昭26	3	8 4 8	新曲 新曲 新曲	
昭27	3	4 4 4	新曲 新曲 新曲（二声）	
昭28	3	4 4 8	既習曲（二声） 既習曲（二声） 新曲	
昭29	5	4 4 4 4 4	新曲 新曲 新曲 新曲 新曲	
		4	※この旋律を移調した譜例（2種類） 新曲	

年度	譜例数	小節数	新曲・既習曲	図・画像
昭30	1	16	新曲（二声）	
昭31	1	16	新曲（二声）	
昭32	2	8 8	新曲 新曲（二声）	
昭33	1	16	新曲（二声）	
昭34	1	16	新曲	
昭35	3	4 4 8	新曲（二声） 新曲 新曲	
昭36	2	8 5	新曲 新曲（三声）	
昭37	3	8 4 4	新曲 新曲 新曲（三声）	鍵盤図 演奏時の配置図
昭38	5	8 4 4 4 4	新曲 新曲（三声） 既習曲（二声） 既習曲 新曲	指揮図、鍵盤図 鍵盤図 ※別途、楽器の画像もある。
昭39	7	4 5 4 8 6 9 6	新曲 既習曲 既習曲 新曲 新曲 既習曲 既習曲	※別途、鍵盤図とたて笛の運指図がある。
昭40	5	12 16 4 4 4	既習曲（二声） 既習曲 新曲 新曲 新曲	鍵盤図
昭41	6	4 4 4 4 4 6	既習曲 既習曲 新曲 新曲 新曲 新曲	鍵盤図
昭42	5	4 8 8 4 8	新曲 新曲 新曲 新曲（三声） 既習曲	鍵盤図
昭43	4	5 6 4 4 8	既習曲 既習曲 新曲 既習曲	楽器の画像 運指図、鍵盤図
昭44	10	4 4 4 4 6 8 4 5 4 11	新曲 新曲 既習曲 既習曲 既習曲 既習曲 既習曲 既習曲 既習曲（リズム譜） ※この他に、選択肢として譜例（4小節）が3つある。 新曲	鍵盤図
昭45	6	4 4 2 4 5 12	既習曲 既習曲 既習曲（リズム譜） 新曲 新曲 新曲	指揮図、鍵盤図

表にしてみると、譜例をはじめとする資料の提示状況には、傾向があることが見て取れる。

昭和28年度こそ《仰げば尊し》《螢の光》の譜例が提示されたが、昭和26年度から昭和37年度までの出題において、既習曲の譜例が示されたのはこの年度のみである。それ以外の年度では、新曲（出題に際してつくられた曲）の譜例が提示された。

しかし昭和38年度以降の出題では、既習曲の譜例が継続して含まれるようになった。これには、昭和33年に告示された中学校学習指導要領で共通教材が指定されたこと、この学習指導要領に基づく教育課程が昭和37年度から全面実施されたことが関係していると考えられる。一方で、新曲の譜例は一貫して提示され続けた。また、昭和37年度以降の検査問題では、鍵盤図をはじめとする図や楽器の画像が何かしら示された。つまり、昭和33年に告示された中学校学習指導要領が全面的に適用された年度内に実施された学力検査（昭和38年度）以降の問題では、新曲・既習曲の両方の譜例が提示され、加えて図・画像も盛り込まれるようになったのである。

こうした資料（譜例、図・画像）を題材に、福岡県ではどのような問題が出題されたのだろうか。

## ② 出題内容

資料8は、昭和26年度から昭和45年度までの間に福岡県で出題された音楽の問題を整理したものである。なお、出題が特定の年度に限られる内容については、紙幅の都合から割愛した。

### 資料8 福岡県で出題された音楽の問題の内容

#### 【音名・階名】

・指定された音の音名や階名を答える。

#### 【音高】

- ・二音間の音程の種類（度数）を答える。
- ・二音間の音程の状態（協和／不協和）を指摘する。

#### 【和音】

- ・指定された部分の和音の種類を答える。
- ・旋律に合う和音の種類を答える。
- ・旋律に合う伴奏（分散和音、リズム）を選ぶ。

#### 【音階】

- ・指定された種類の音階で形づくられた旋律を選ぶ。

#### 【用語や記号】

- ・記号の名称を答える。
- ・用語や記号の意味を答える。
- ・速度記号に対応する速度標語を選ぶ。
- ・記号を適切な位置に付ける。

#### 【拍・拍子】

- ・拍数が不足している小節を指摘する。
- ・譜例（各小節の音符の種類と数）から、拍子を特定する。
- ・旋律に合う指揮の図形を選ぶ。

#### 【既習曲の読譜力】

- ・譜例から、曲名や作曲者を特定する。
- ・譜例に含まれる既習曲に似ている楽節を指摘する。
- ・空白小節を補充して、旋律（既習曲）を完成させる。

#### 【曲調や曲想】

- ・譜例から曲調や曲想を把握する。
- ・曲調・曲想に合う旋律を選ぶ。

#### 【調】

- ・旋律全体あるいは一部分の調を判定する。
- ・指示に従って移調させた旋律の調を判定する。

#### 【旋律の適否】

- ・まとまりのある旋律を選択肢から選ぶ。
- ・適切に移調されている譜例を選ぶ。
- ・旋律の進行が悪い（演奏しにくい）部分を指摘する。

#### 【演奏形態】

- ・譜例をもとに演奏形態を答える。

#### 【楽器の演奏】

- ・指定された音に対応する鍵盤の位置や運指を答える。
- ・鍵盤を指定された順に弾いた音の進行に合う譜例を指摘する。

#### 【旋律の創作】

- ・空白を補充して、題意に合う旋律をつくる。
- ・譜例（小節、楽節）を並び替え、旋律（曲）を完成させる。

#### 【曲の形式】

- ・旋律の形式を答える。

#### 【楽器】

- ・原曲で旋律を演奏している楽器の名称を答える。

このような内容で構成された福岡県の音楽の問題だが、福岡県教委は作成にあたってどのようなことを意図したのだろうか。また、問題内容について、現場の教師はどのように受け止めていたのだろうか。

## 「出題のねらい」と現場の教師の所感

福岡県教委（教育庁）が発表した各教科の「出題のねらい」が、新聞に掲載されていた時期（昭和35年度～昭和44年度）がある。表6は、音楽に関する記述を一覧にしたものである。また、これと重なりのある時期（昭和35年度～昭和41年度）には、「出題傾向」「問題を見（み）て」などの名目で、検査問題に対する教師の所感も掲載されていた。表7は、それを一覧にしたものである<sup>22)</sup>。

### ○「基礎的」「基本的」な問題

「出題のねらい」を「問題の程度」という視点からみると、「基礎的な」（昭和35・36年度）、「基本的でやさしい」（昭和37・38・39年度）、「基本的な」（昭和40・41年度）、「常識」（昭和40・41年度）などの言葉が散見され（表6の傍線部）、受検生をふるいにかけるような問題は意図されていなかったことが分かる。また、多くの年度において、日常の学習で対応できる程度のものであることが記されている。

### ○重視された「譜を読む力」

音楽に関する問題数と配点は限られるため、出題において「何に重点を置くか」は殊更に重要となる。その視点で「出題のねらい」をみていくと、例えば昭和35年度には「楽譜を中心に能力をためすことに力をおいている」と記されて



いる。昭和 36 年度から昭和 41 年度においても、「重点」や「中心」という言葉とともにあるのは「読譜力」または「譜を読む力」である。昭和 42 年度以降は年度によって表し方に違いがあるが、「読譜」という言葉が直接含まれる昭和 43 年度や昭和 45 年度のみならず、「楽譜をみて……とらえること」（昭和 42 年度）、「音感覚を伴う視唱力」（昭和 44 年度）という箇所にも、「譜を読む力」を重視する姿勢が内在している。こうしたことから、福岡県教委が「楽譜から音楽を捉える力」を問題作成の軸としていたことが分かる。全ての年度の問題で譜例が提示されていたことは、その証左といえよう。実際、現場の教師も「読譜力が重視されている」「読譜力に設問の中心をおいてい

るのは……妥当と思う」（昭和 38 年度）との所感を示しており、それが「本当に読譜力がついていないとできない」（昭和 41 年度）といった受け止めにつながっている年度もある。さらに、読譜をもとにした曲想判断や旋律完成の問題についても「日常の音楽学習の中で身につけていくべき力を試すのには、……いい問題だと思う」（昭和 41 年度）との評価がみられている<sup>23)</sup>。

このように、福岡県教委の「出題のねらい」は、検査問題を通じて、たしかに教師に伝わっていた。また、教師もそのような「譜を読む力」に重点を置いた出題に一定の評価を示していたのである。

表 6 福岡県教委（教育庁）が発表した「出題のねらい」

年度	福岡県教委（教育庁）が発表した「出題のねらい」
昭 35	知識だけにかたよるのを避け、ペーパーテストとしてはできるかぎり音楽能力をみることにした。だから出題の方法も <u>楽譜を中心に能力をためすことに力をおいているが</u> 、平素、楽譜にしたいし基礎的なことを身につけていれば容易に解ける問題ばかりだ。 <sup>24)</sup>
昭 36	表現（歌唱、器楽、創作）鑑賞などの音楽経験の領域全部について基礎的な面をできるだけみられるように出題した。とくに実技教科としてペーパーテストは限界があるが、 <u>読譜力などの日常の学習において習得した技能をためすような面に重点をおいて出題した</u> つもりだ。 <sup>25)</sup>
昭 37	出題のねらいは二つある。第一は都市、農村などの地域差、各校の施設設備などの条件によって差のつかないようにひごろの音楽の授業の実情を考慮して基本的でやさしい問題の出題に努めた。第二のねらいは音楽の基本である <u>譜を読む力をみるような問題を中心に</u> 出題したが、実音をともなわないペーパーテストには限界があるため問題作成には苦労した。とくに知識偏重にならないようにひごろ習っている表現、感覚の全領域にわたるよう出題した。 <sup>26)</sup>
昭 38	①中学校三カ年の学習で習得した音楽の基本である <u>譜をよむ力をみるような問題を中心に</u> 出題したが、実音をともなわないペーパーテストであるため出題についてはいろいろと苦労した。しかし知識偏重にならないよう日ごろ習っている表現、鑑賞の全領域にわたるよう、移行措置をじゅうぶん考慮して出題した。②都市農村などの地域差、各校の施設・設備などの条件によって差のつかないように、ひごろの音楽の授業の実情を考慮して、 <u>基本的でやさしい問題の出題につとめた</u> 。 <sup>27)</sup>
昭 39	中学三カ年の学習で習得した <u>譜を読む力をみるような問題を中心に</u> 出題した。実音をともなわないペーパー・テストであるため出題には苦労した。しかし知識偏重にならないよう、表現・鑑賞の全領域にわたるようつとめてく本年度は改訂指導要領の線にそって共通歌唱、鑑賞教材および器楽の面からも出題した。なお、都市・農村などの地域差や各校の施設などの条件によって差がつかないよう <u>基本的でやさしい問題を出した</u> 。 <sup>28)</sup>
昭 40	<u>読譜力を中心に</u> 音楽の基本的な知識や能力を主とした問題をつくった。地域差や施設設備の差などで、ハンディの生じないように注意している。問題は共通教材や新曲などの歌曲を選んで、中学三年間の学習内容を中心に 出題しているが、ペーパーテストの限界を考え、必要な常識に <u>ねらいを置いている</u> 。 <sup>29)</sup>
昭 41	正常の音楽学習で行なわれる表現や鑑賞の基本的な能力、理解を主として問題を作った。たんなる音楽理論の記憶でなく、 <u>読譜力を中心として</u> 、音楽にたいする感受性や機能的な理解を必要とするような出題に努力した。問題曲は、共通教材や新曲としたが、わらべうた風の旋律などを入れて、バラエティーを考えた。また、地域や学校の施設、設備等で差がつかないよう注意した。ペーパーテストの限界を考慮しながら、中学三年間の平常の教育でじゅうぶんこなせるような、 <u>基礎的、常識的なものにねらいを置いた</u> 。 <sup>30)</sup>
昭 42	音楽を感覚的に理解したり鑑賞する基礎能力、音楽の感受性を評価しようと努めた。したがってたんなる音楽の知識でなく、音楽そのものをどう受け取り、どう理解しているかを判別する問題にくふうをこらした。 <u>楽譜をみて旋律の流れや曲想などをとらえることが前提となるが</u> 、ふだんの授業の積み重ねがあれば解答できるように配慮した。また地域差、学校の設備の差などで不利にならないように注意もしている。問題曲はできるだけ親しみやすい変化のあるものを取りあげた。 <sup>31)</sup>
昭 43	音楽の感得、理解のもとになる <u>読譜、視唱奏を中心に</u> 出題した。知的理解も必要であるが、これが音楽感覚や表現と一致しているかを確かめる問題を多くした。領域も各方面にわたるよう、また地域や設備により差異が生じないように留意し、とくに共通教材は、それが目的とする『いつ、どこでもだれとも楽しく歌ったり聞いたりする』ていどの学習内容から出題した。器楽については、個人持ちの種類や好みにより選択できるよう、また模式図で基礎的操作にとどめ日常の学習が正常に行なわれていれば答えられるていどとして出題した。 <sup>32)</sup>
昭 44	演奏力を身につけ、美を追求し創造するための高い批判力、鑑賞力が養われているかを、音感覚を伴う視唱力、旋律が持つ感情、味わいの面から判定するようくふう。新傾向としては西洋音楽の旋律と、日本音楽の旋律を対比させている点と器楽的要素や鑑賞的要素を美しい旋律記憶の中でたずねた。 <sup>33)</sup>
昭 45	実技面の問題が重視されており演奏だけにこだわらず鑑賞力、基礎的理解力なども広く考慮して出題されている。楽譜は数学の数式、国語の文字と同様に <u>読譜力があるかどうかをためされる</u> 。音楽の内容を深く理解し、それが演奏の裏付けに必要という考え。このため音楽の三要素や各領域でこのような観点から出題されている。日本音楽は出題数の制限からはぶかれた。 <sup>34)</sup>

表7 出題された音楽の問題に対する教師の所感

年度	「出題傾向」「問題をみて」などとして掲載された検査問題に対する現場の教師の所感
昭 35	当然していなければならない最低の理解事項の範囲で出題されていることと、 <u>ほんとうに読解力が身につけていなければならない</u> 。曲想の判断の問題は例年の傾向だがなかなかよいと思う。ただ曲想の判断の問題がハーモニーのつけ方でどちらにもとれるような曲が入っているのでは生徒がまごつくのではないか。客観的に判断のつく曲想の問題がほしかった。 (福岡学大付属中学校教員 福岡利典氏) <sup>35)</sup>
昭 36	ペーパーテストに実技面を取り入れたことにはやや問題がある。しかし、一般的にいつて全領域をためしている点、苦心のあとがうかがわれる。やさしい転調を取りあつかうなど心で歌うことを前提としているのは良い試みと思う。ただ問1の(2)は問題の所在がはっきりしないようだ。 (博多二中・八尋教員) <sup>36)</sup>
昭 37	全体的に知的理解をねらった問題と楽譜を通じて感覚的に曲の感じをつかむ力をみる問題と両方の立ち場で問題がつくられていることは、ペーパーテストで中学の音楽の力をみる点で一応妥当だ。しかし【五】の(4)の曲の感じをみる問題は2の『速くおどるような』と3『中ぐらいの速さで、のびのびした』のどちらをとるか判断に迷う生徒が出たのではないか。曲の感じなどというものは各自の感覚的な差があるので、だれがみてもそうだとなくのいくようなものがほしい。 (付属中福岡先生、百道中白土先生) <sup>37)</sup>
昭 38	問題はむずかしくもなく、やさしすぎることもない。全般的に読解力が重視されていることが特徴だ。感覚的な力をペーパーテストでみるにはやはりこれしかないだろう。読譜力に設問の中心をおいているのはその意味で妥当と思う。文部省が示している共通教材をよくマスターしてないとできない問題ばかりだが、逆にマスターしていればかなりらくに解答できる。ただ、楽器類は都市の学校にくらべ、辺地の学校では教材が少ないのでこのへんにギャップがあろう。 (付属中・福岡先生、百道中・白土先生) <sup>38)</sup>
昭 39	問題はむずかしくない。中学校で習っておかねばならない最低限の線から出たもので好感を呼ぶ。歌唱、器楽、創作、鑑賞のすべてを取り上げ、とくに文部省が指示している共通教材が多く取り入れられているのは公平な立ち場からの出題だと思う。新しく器楽が出題された傾向は喜ばしい。ただ、中学校では笛とハーモニカのどちらかをやることになっているのに、笛だけの出題で、ハーモニカだけをやっていた生徒は困ったのではないか。両方出題して好きな方で解答するやりかたが親切だと考える。 (付属中・福岡利典教諭) <sup>39)</sup>
昭 40	全体をみわたして、中学の音楽活動の全領域にわたって出題されていることを感じるし、片寄りがなく結構だと思う。このていどの問題であれば、日常の音楽学習を、はじめにやっておれば、だいたいできるものが大部分だ。とくに曲想判断、旋律完成の問題は、じゅうぶんに楽譜をみて、音楽をききとり、感じる力がついていないとむずかしいのではないかとも思える。しかしこれが日常の音楽学習の中で身につけていくべき力を試すのには、たいせつなことで、力をみるためにはいい問題だと思う。とくにことしの傾向で新しいものは、日本の音楽がとりあげられたことである。曲名、旋法、曲想を問うているが、現代の音楽教育の流れからみると、この傾向もやむをえないと思う。和音のところでは和音記号ⅠⅣⅤもつけてほしかった。 (福岡学大付属中教諭・福岡利典) <sup>40)</sup>
昭 41	中学の学習内容である歌唱、器楽、創作、鑑賞を通して身につけた音楽の学力を試す問題としては一応、妥当なもので、日常の学習をじゅうぶんにやっておれば、だいたいとける問題ばかりだ。とくに補習廃止の立ち場からも正常な正課時の学習でじゅうぶんとけることは当然ではあるが結構なことだ。 問1は共通教材からの出題で、問2は単なる丸暗記でなく音楽を本当に理解していなければならないよい問題だ。問3の一は和音の理解の問題だが正解は(3)を要求しているようだが(4)でも間違いとはいえない。問3の二と問4も本当に読解力がついていないとできないし適当な問題だと思う。 (福岡学大付属中・福岡利夫) <sup>41)</sup>

## 出題された問題の特徴

全ての年度の問題において譜例が提示され、問題の作成にあたって「譜を読む力」に重点が置かれていただけあって、福岡県で出題された音楽の問題の大部分は楽譜と関わらせたものになっている。ここでは、福岡県で継続して出題された内容、出題回数を重ねる中で工夫や改善がみられた内容、全国的に議論を伴った内容について検討することで、福岡県で出題された音楽の問題の特徴を明らかにする。

### ○ 継続して出題された問題

#### ・拍子の特定

多くの年度において出題された問題内容の一つが、譜例（旋律）の各小節に含まれる音符の種類と数から拍子を特定する問題である。昭和28年度には、提示された拍子をもとに譜例（旋律）に縦線を書き入れる問題が出題されているが、いずれにしても解答に必要な知識や理解に大きな差異はない。

#### ・曲調や曲想の把握

福岡県で最初に出題された音楽の問題（昭和

26年度）は、提示された譜例（旋律）について「どのように歌ったらよいでしょうか」というものだった。「どのように」を特定するためには、その旋律がどのような曲調や曲想を有しているかを把握する必要がある。この問題を皮切りに、福岡県ではほぼ全ての年度で曲調や曲想を答える問題、またはその把握に基づく問題が出題された。このような問題は、譜例があるからこそ出題できるものである。

\* \* \*

ここでは、継続して出題された問題として「拍子の特定」「曲調や曲想の把握」について取り上げた。どちらも、“譜例をもとに解答を見いだす”という点で共通している。しかし、この二つの「譜を読む力」の水準には、決定的な違いがある。

拍子を特定する問題では、楽典の知識（この場合は、拍子記号、音符の音価に関する知識）を有していれば、それをもとに正答することができる。一方で、曲調や曲想を把握することが前提にある問題では、譜例に示された音符が具体的な音（音響）としてイメージされなければならない

い。このように考えると、譜例を伴った問題に取り組む際の「譜を読む力」には、“楽譜の仕組みが分かる”という水準と“楽譜から音を感じる”という水準とがあることが分かる。例えば、福岡県では旋律の一部に合う和音を選ぶ問題も継続して出題されたが、この問題で求められる「譜を読む力」は“楽譜から音を感じる”という水準に分類できる。どちらの「譜を読む力」も音楽活動において欠くことのできないものである。福岡県では、その両方が継続して出題されていたのである。

#### ○ 問題の工夫・改善

継続して出題される中で、出題の仕方にも変化がみられた。例えば、空白を補って旋律を完成させる問題では条件が変化した。また、全体的に「実際の音楽活動」を想定した問題が出題された。ここでは、この二点について取り上げる。

##### ・「曲調・曲想」まで含めた「旋律の完成」

空白を補充して題意に合う旋律をつくる問題も、継続して出題された内容の一つである。資料9は、いくつかの年度に出題された問題を抜粋したものである。昭和27・35・38年度においては「歌いやすい」あるいは「まとまった」という条件を満たすように旋律をつくる必要がある。その後、昭和42年度には「終わった感じ」、昭和44年度には「終わった感じ」だけでなく、「終わりを、なごり惜しむような感じ」という条件が付された。このように、出題を重ねる中で「曲調・曲想」までもが条件に加えられるようになったのである。

#### 資料9 旋律を完成させる問題（抜粋）

##### 昭和27年度

- ・次の(1)(2)の曲のあいている小節に、それぞれ下書いている四つの小節のうちから、おのおの一つを選んで、その記号を( )の中に書き入れ、歌いやすいまとまった旋律にしよう。


##### 昭和35年度

- ・〔C〕の第七小節は空白になっているが、ここに音符を入れて全体をまとまった旋律にするには、〔C〕の下に{ }のうち、どれを入れるのが最も適当ですか。



##### 昭和38年度

- ・〔A〕曲の空白の小節〔C〕に、〔D〕の①、②、③の小節のうち、どれを入れると自然で歌いやすい曲になるか。最も適当なものを一つ選び、その番号を答の欄に書き入れなさい。

##### 昭和42年度

- ・C曲を、終わった感じで、歌いやすい曲としてまとめるためには、の空白の部分にどんな旋律を続ければよいか。D群の④～⑥のうち最も適当なものを一つ選び、答の欄に書き入れなさい。

##### 昭和44年度


- ・A曲を日本民謡風の旋律にし、終わりを、なごり惜しむような感じの曲にするには、の部分にCの1～4のうち、どれを入れたらよいか。
- ・B曲の旋律を完全に終わった感じにするには、の部分にDのア～エのうち、どれを入れたらよいか。

ここでは旋律を完成させる問題を例に挙げたが、継続して出題された問題ではマイナーチェンジが図られ、より実践的な力をみる問い方になっていた。

##### ・「実際の音楽活動」を想定した出題

出題内容を整理した資料8からは読み取れないが、回を重ねる中で、複数の内容を組み合わせたような問題が出題されることもあった。資料10は、昭和43年度に出題された問題である。

#### 資料10 和音を弾く際の鍵盤の位置を答える問題（昭43）

- ・〔H〕曲(イ)の旋律のの音に和音をつけるとすれば、I群3の和音のうちどれが最も適当か。正しいものを一つ選び、図Lのはんばんの番号で低い音から順に書きなさい。

この問題では、旋律に合う和音を選択肢から選ぶだけでなく、演奏時の鍵盤の位置を示すことも求められている。和音を選ぶ問題も、鍵盤の位置を答える問題も、それぞれ独立した形では出題されてきた。しかし、この問題では両者を結び付け、一つの解を導かなくてはならない。しかも、特定した和音に対応する鍵盤の位置を示すため、和音の判断を誤ると（基本的には）得点できなくなる。受検生にとっては喜ばしい問題ではないが、実際に「旋律に伴奏を付ける場面」を想像すると、この二つが分かち難い関係にあることに気付かされ、合点がいく。

旋律に伴奏を付ける場合、その部分にふさわしい和音を特定し、その音に対応する鍵盤を弾く。和音が特定できなければ事は進まないが、たとえ和音を特定できたとしても、構成音に対応する鍵盤の位置が分からなければ伴奏は付けられない。この「伴奏を付ける」というある種の問題解決の場面においては、どちらか一方を誤ると旋律に合う和音は鳴り響かないのである。このように考えると、問題解決の過程とその結果が検査問題において再現されており、実際の活動に寄り添った出題といえる。

その他にも、昭和37年度には、譜例に示された曲の演奏形態の配置図（各パートの演奏位置）を選ぶ問題が出題された。これも実際の活動が意識された出題である。また、福岡県では、旋律に



合う和音（重音）を選ぶ問題も継続して出題された。その流れにあって、昭和45年度には実際の伴奏に近い「分散和音」が選択肢として示された。同じ年度には、旋律に合うリズム伴奏を選ぶ問題も出題された。

資料10に示した問題の作成にあたっては、内容を組み合わせることに主眼があったわけではないはずである。それは結果に過ぎず、その背後に「実際の音楽活動」の想定があることこそが工夫・改善の要である。事実、「実際の音楽活動」を想定した出題は、福岡県の音楽の検査問題を特徴付けている。例えば、昭和31年度の問題文にはそれが色濃く反映され、大問の導入文は「上のような二部合唱曲を、太郎君と花子さんが合唱することにした……」と示された。資料11は、それに続く小問の問題文の一部である。

#### 資料11 歌唱（合唱）の活動を想定した問題文（昭31）

- (2) 花子さんは高音部を歌ってみて、第  小節のリズムがとりにくいのに気がついた。
- (3) 太郎君も低音部を歌っていたが『(1・A 2・B 3・C 4・D)の楽節は“さくら さくら”にそっくりだ。第  小節は音符の拍数が少ないし、第  小節の旋律も歌いにくい。』といった。
- (4) 第16小節にはPoco rit. という標語があるので、(1・元気よく 2・やさしく 3・少し早めに 4・少しおそめに) 歌うことにした。

いずれも、譜例に基づく実際の活動（歌唱）を想定した問い方になっている。そのため、(2)(3)では、生徒は楽譜に書かれた旋律を再現しながらたどり、「リズムがとりにくい」箇所や「歌いにくい」箇所に気付いたり、「“さくら さくら”にそっくり」な部分を見つけたりすることになる。ただし、(4)の「……という標語があるので、……歌うことにした」という設問では、標語の意味を知っていれば解答できてしまう。その点で後述する「むき出し式の問題」に近いが、実際の歌唱の活動では、この問題のように標語の意味を確認し、それを反映させて歌うため、実際に即した設問ともいえる。この問題は、実際の音楽活動においても、標語の意味がそのまま生かされる場合があることを物語っている。結果として、“むき出し”で問うか、活動を想定して問うかの違いだが、こうしたところに福岡県教委が「実際の音楽活動」を意識して出題する姿勢が表れている。

#### ○ 全国的な議論と福岡県の状況

音楽の学力検査をめぐるのは、例えば、読譜力を測るために提示されたはずの譜例を生徒が暗記している状況、音楽活動をしていなくても解答が可能な内容が出題されている状況などが、全国的に議論になっていた。これらに関わる福岡県の状況は、どのようなものだったのだろうか。

##### ・楽譜の写真暗記

昭和33年に告示された学習指導要領が全面実施されると、共通教材に指定された曲が譜例として示されるようになった。すると、テーマやその一部（特に冒頭）を覚えることで正答を得ようとする状況が生じた。当時、福岡市立博多第二中学校の教諭だった八尋静夫は、このような状況を「楽譜の写真暗記」と表現し、懸念を示した<sup>42)</sup>。福岡県でも譜例と曲名とを対応させる問題が継続して出題されたが、最も頻繁に出題されたのは「楽譜の写真暗記」と揶揄された形式の問題であった。そうした状況の中でも、いくつか改善の試みがみられた。

一つ目は、「曲名をもとに譜例を選ぶ」問題である（昭和44年度）。従来とは逆の流れをたどるが、解答に必要な力に大きな差はない。そのため、「楽譜の写真暗記」が通用する可能性は高い。なお、昭和45年度にはリズム譜から曲名を指摘する問題が出されたが、これは《ボレロ》であるがゆえに可能な出題なため、少し特殊である。

二つ目は、譜例として示す箇所の変更である。昭和38年度の《サンタ ルチア》、昭和40年度の《花》、昭和41年度《こもり歌》では、曲のおわりの部分が譜例として示された。曲の冒頭を覚えている生徒に絶望をもたらし出題である。その点で、(部分的な)写真暗記を牽制する役割が見込める出題である。

三つ目は、曲名を問わない出題である。そのうちのひとつが、譜例の空白部分に適切な旋律のリズムを選択肢から選ぶ問題である（昭和43・45年度）。もう一つは、その曲（旋律）を演奏する楽器の名称や写真を答える問題である（昭和43・44年度）。これは、曲を聴いたことがないと解答が難しい問題である。

以上のように、福岡県でも「楽譜の写真暗記」で事足りる問題は出されていた。一方で、出題の形式を変更したり、譜例として提示する部分を変えたり、曲名ではなく「曲」や「演奏」の側面から学習経験や理解の状況を探ったりする問題も出されていた。

### ・記号や用語の活用

音楽の学力検査では、記号や用語の名称、意味を問う問題が全国的に出題された。多くの場合、楽典の知識を“むき出し”にした出題だったため、“音楽不在の問題”“音楽活動を伴わない出題”というような趣旨の批判が寄せられた。

譜例と関わらせて問題を作成していた福岡県では、ある部分に付された *mf* について、「*mf* の記号は 1 (つよく)、2 (ややつよく)、3 (ややよく)、4 (よく) 歌う発想記号である」(昭和 27 年度)といった問題が出題された。しかし、これでは譜例は特に機能しておらず、情報(記号の意味)をそのまま出力する構造は「むき出し式の問題」と変わらない。

一方で、記号や用語について取り上げた福岡県の問題では、もう一つ異なる問い方も複数年度にわたってみられた。例として、いくつかの年度の問題を資料 12 に挙げる。

#### 資料 12 記号を適切に運用する力をみる問題

##### 昭和 36 年度

・[A] 曲の①の小楽節を歌う場合、上の楽譜に *f* をつけるとしたら、次のうちどこにつけるのが最も適当ですか。

##### 昭和 42 年度

・A 曲を歌うのに、> (アクセント) の記号をつけるとすれば、①～④のうち、どこが最も適当か、一つ選びなさい。  
・B 曲で、*rit.* をつけて歌うとすれば、⑤～⑧のうち、どこが最も適当か、一つ選びなさい。

##### 昭和 43 年度

・H 曲 (ア) の旋律で、∨ (プレス) をするのに最も適当なところを、①・②・④のうちから一つ選びなさい。

##### 昭和 44 年度

・I 曲のフレーズを正しく表現して歌う場合、2 段目の終わりの小節のプレスの位置は、ア～ウのうちどこが最も適当か。

このような問題では、*f* にしても、*rit.* にしても、> (アクセント) にしても、記号の機能(意味)は直接問われていない。しかし、それぞれの問いに答える際には、それを理解している必要がある。その上で、楽譜に書かれた音や音楽の流れを想像し、それに対して問題の意図を踏まえながら記号を運用することが求められている。∨ (プレス) についても同じで、譜例の範囲において∨を適切に位置付けることが求められている。つまり、これらの問題では、記号を適切に運用する力が問われており、その「適切さ」を支えるのは、“楽譜から音を感じる”読譜力と記号の意味内容の理解である。「むき出し式の問題」と比べると、問題を解く際に必要となる力に大きな違いがあること

が分かる。

例えば、記号(*f*)と形式的な意味(強く)は一對に結び付けられるため、記号の意味を選択肢から選ぶ問題では、これらの間に「思考・判断」が立ち入る隙間はない。ゆえに、この二つを対応させる問題は、「覚える」ことで対応できる。一方、資料 12 の問題例はいずれも、記号を付けるのに適当な箇所を指摘する形になっている。「適当な箇所」を「判断」するために、記号の意味内容(理解)を念頭に、読譜力を発揮しながら「思考」する必要がある。このように、「実際の音楽活動」を想定した「問題」にすることによって、音楽活動での問題解決の場面が設定され、解決に必要な能力や理解が「思考」によって結び付けられ、適切に「判断」していくような問題が出題できるのである。

### ・学習指導要領の趣旨を踏まえた器楽の出題

福岡県では、音楽の問題が出されるようになった当初から譜例が示されていたが、昭和 37 年度以降は鍵盤図が継続して提示されるようになり、その後も年度によって運指図や楽器の画像が示されるようになった。これらは、器楽に関する出題の充実が図られたことを示唆している。

昭和 33 年に告示された中学校学習指導要領では、器楽で学習する楽器は「リード楽器または笛を中心」とするよう示された。「または」という選択的接続詞を踏まえると、中心となる楽器には 2 種類(リード楽器、笛)の可能性があることになる。また、「中心」と記されているため、必ずしも全ての生徒がどちらかの楽器を経験するわけではない。これらのことと関連して、全国的には選択が認められているリード楽器と笛のどちらかだけを取り上げて出題することに疑問が呈された。

福岡県でも、昭和 39 年度には、次のような問題が出題された(資料 13)。

#### 資料 13 たて笛の運指と対応する音名を問う問題(昭 31)

・[F] の㊸、㊹の図は、たて笛の指使いを示したものである。㊸、㊹のようにして吹いたときの音の高さを、その下の譜表の 2～8 のうちから一つずつ選び、その番号を答の欄に書き入れなさい。

たて笛だけが取り上げられたこの問題について、福岡学芸大学附属中学校の教諭だった福岡利典は、「笛だけの出題で、ハーモニカだけをやっていただ生徒は困ったのではないか」との所感を示していた(表 7 を参照)。こうした課題について、その後の福岡県の出題では改善がみられた。昭和

43 年度の問題では、「図 J（ソプラノ立笛）、図 K（ソプラノシングルハーモニカ）のうちどちらかを選び……」という問題文になっている。

\* \* \*

このように、全国で議論になった課題と似通った状況は福岡県でもみられていた。ただし、それを野放しにすることなく、解決に向けた試みがみられたこともまた事実である。

なお、福岡県では、不正確な問題文に高等学校の教諭が抗議する事案（昭和 36 年度）<sup>43)</sup>、音符に誤植があったため設問自体が削除される事案（昭和 42 年度）<sup>44)</sup>があったが、大きな問題にはならなかった。

#### 4. 本稿のまとめ

本稿の目的は、福岡県の高等学校入学者選抜に関連して実施された学力検査での音楽に関する出題の特徴を明らかにすることであった。

本稿では、まず学力検査の実施に関わる文部省の方針とそれに基づく福岡県教委の判断について整理した。また、福岡県で実施された学力検査の全体像を把握する過程において、（音楽の問題が出題されていた期間に限られるが）学力検査の実施期日と実施方法について明らかにすることができた。こうしたことも、本稿の成果の一端である。

福岡県で出題された音楽に関する問題の特徴は、以下の諸点にまとめることができる。

##### ○ 形式面の特徴

- ・問題は全て「選択式」によるものだった。
- ・全ての年度の問題において譜例が示されていた。それに加えて、昭和 37 年度以降は、鍵盤図など、何かしらの図・画像が示されるようになった。
- ・どの年度においても学力検査のためにつくられた新曲の楽譜に基づいた問題が出題された。昭和 33 年告示の学習指導要領が全面实施されてからは、共通教材を中心とした既習曲の楽譜も提示されるようになった。

##### ○ 内容面の特徴

- ・「基礎的」「基本的」な問題、日常の学習（授業）で対応できる程度の問題の出題が意図されていた。
- ・「楽譜から音楽を捉える力」が重視されていた。
- ・「拍子の特定」「曲調・曲想の把握」「旋律の完成」など、継続して出題された内容があるが、いずれもが“譜例をもとに解答を見いだす”という点で共通していた。ただし、そこでの「譜

を読む力」の水準には、“楽譜の仕組みが分かる”“楽譜から音を感じる”の二つがあった。いずれも音楽活動をする上で欠かせないもので、福岡県ではどちらも継続して出題されていた。

- ・出題が継続される中で、工夫・改善が施されていた。
- ・福岡県の音楽の問題を特徴付けているのは「実際の音楽活動」を想定した問題である。
- ・「楽譜の写真暗記」が生じるような出題をはじめ、全国で議論された事案と同じような状況は福岡県でも起きていた。いずれの項目についても、改善の試みが何かしら打ち出されていた。

\* \* \*

以上に挙げた事柄は、福岡県で出題された音楽の問題だけでなく、学力検査の実施要項、福岡県教委による「出題のねらい」、問題に対する現場の教師の所感などを収集したからこそ浮かび上がらせることができた本稿の成果である。本稿を過去の墓掘りに止めることなく、現代的な課題を生産的に解決するための試金石としていきたい。

一方、学力検査に関わる現場の実態や問題の改善における問題作成者の意図、当時の中学生の声など、本稿には「福岡県における音楽の学力検査」の諸事実を解明する上で不十分なところも多く残されている。高等学校入学者選抜に関わる学力検査に関する資料は、特定のまとまりをもった文献として整理されていないことも多い。研究課題の内実に迫るために、一次資料の発掘とその精査を重ねていきたい。

#### 註

- 1) 福島謙次（1952.11）「中学校音楽科 アチーブメント実施について」『教育音楽』7（11）：37-38。
- 2) 発学 52 号，文部省学校教育局長通牒。
- 3) 二三学第八一五号。福岡県教育部長から各地方事務所長，各公私立中等学校長，各市長，各公私立新制中学校長に宛てられた文書である。
- 4) 発学第 11 号，文部省学校教育局長通達。
- 5) 文初中第 178 号，文部省初等中等教育局長通達。
- 6) 近森一重（1951.12）「アチーブメントテストに望むもの」『教育音楽』6（12）：18-23。
- 7) 福岡県教育委員会（1950.1）「昭和二十五年以降高等学校入学者選抜について」『教育福岡』2（5）：38-39。



- 8) 福岡県教育委員会(1950.4)「学力検査(アチーブメント・テスト)を終えて(一)」『教育福岡』2(4):37-40。下線は筆者による。
- 9) 昭和25年度の学力検査では、福岡県の他に17の都道府県(北海道, 青森, 秋田, 山形, 茨城, 東京, 神奈川, 福井, 山梨, 石川, 滋賀, 大阪, 兵庫, 鳥根, 香川, 高知, 愛媛)で音楽の問題が出題されなかった。
- 10) 6)に同じ。
- 11) 福岡県教育委員会(1950.6)「教育委員会会議録抄(三・四月分)」『教育福岡』2(6):34。
- 12) 福岡県教育委員会(1951.1)「昭和二十六年度公立高等学校入学者選抜要項」『教育福岡』3(1):9。
- 13) 文初中第411号, 文部省初等中等教育局長通達。
- 14) 沖縄は米国の占領下にあったため, 除外した。
- 15) 高等学校入学者選抜学力検査方法の改善について(答申), 昭和43年7月10日, 福岡県高等学校入学者選抜検討委員会。
- 16) 福岡県教育委員会(1970.7)「高等学校入学者選抜方法の改善に関する答申の説明」『教育福岡』22(7):4-6。
- 17) 福岡県教育委員会(1970.1)「昭和四十五年度県立高等学校入学者選抜要項」『教育福岡』22(1):32-33。
- 18) 福岡県教育委員会(1970.12)「昭和46年度県立高等学校入学者選抜要項」『教育福岡』22(12):30-31。
- 19) 昭和29年度の学力検査は2/20(土)の1日のみで実施される予定だったが, 教職員組合の催し物との兼ね合いから期日変更が申し入れられ, 2/21(日)を加えた2日間での実施となった。
- 20) 例えば, 福岡県教育委員会(1961.7)「高校入学者選抜学力検査の実施概況」『教育福岡』13(7):19-20に, そのことが記されている。『教育福岡』においては, 昭和41・42・45年度の検査期日についても同様の記述がある。他の年度の申合せ状況については定かでないが, 隣接する県同士で調整があったものと推察される。
- 21) 青森, 岩手, 宮城, 茨城, 埼玉, 新潟, 富山, 岐阜, 石川, 京都, 大阪, 奈良, 鳥取, 岡山, 山口, 徳島, 大分, 熊本の各府県である。
- 22) 表6・表7における学校名や人物名の表記は, 記事のままにしてある。
- 23) 表6・表7に整理した引用文のうち, 本段落の記述に関わる箇所には波線を付している。
- 24) 出題のねらい, 西日本新聞, 1960.3.10・夕:3。
- 25) 出題のねらい, 西日本新聞, 1961.3.10・夕:3。
- 26) 出題のねらい, 西日本新聞, 1962.3.10・夕:2。
- 27) 出題のねらい, 西日本新聞, 1963.3.11・夕:5。
- 28) 出題のねらい, 西日本新聞, 1964.3.11・夕:4。
- 29) 出題のねらい, 西日本新聞, 1965.3.10・夕:3。
- 30) 出題のねらい, 西日本新聞, 1966.3.10・夕:2。
- 31) 出題のねらい, 西日本新聞, 1967.3.10・夕:2。
- 32) 出題のねらい, 西日本新聞, 1968.3.11・夕:3。
- 33) 出題のねらい, 西日本新聞, 1969.3.11・夕:2。
- 34) 出題のねらい, 西日本新聞, 1970.3.11・夕:2。
- 35) 出題傾向, 西日本新聞, 1960.3.10・夕:4。
- 36) 出題傾向, 西日本新聞, 1961.3.10・夕:4。
- 37) 出題傾向, 西日本新聞, 1962.3.10・夕:2。
- 38) 出題傾向, 西日本新聞, 1963.3.11・夕:6。
- 39) 問題を見て, 西日本新聞, 1964.3.11・朝:5。
- 40) 問題をみて, 西日本新聞, 1965.3.10・夕:2。
- 41) 問題をみて, 西日本新聞, 1966.3.10・夕:3。ここでは「福岡利夫」となっているが, 他年度の記事を踏まえると「福岡利典」が正しく, 「夫」は誤植と考えられる。
- 42) 八尋静夫(1964.5)「さらに前向き作問を」『教育音楽 中学版』8(5):32-33。八尋はこの記事において, 「単なる曲の始まりの旋律の提示は, 楽譜の写真暗記?(視覚のみの暗記)の恐れが生じないか」と述べている。
- 43) 音楽の問題に誤り: 先生が教育庁に抗議, 西日本新聞, 1961.3.11・夕:5に詳しい。
- 44) 音楽問題でミス: 採点からはずす, 西日本新聞, 1967.3.11・朝:10に詳しい。